

「世界の東大」へ変身計画 外国人スタッフ1300人に
2007年02月24日06時01分

東京大学は国際化を急ぐため、教授や講師、助手らの外国人スタッフを、現在の5倍にあたる1300人規模に増やす方針を明らかにした。世界各地に置く東大の研究所や事務所も5倍強に増やし、人材を発掘して日本に招く。日本の最高学府を自負する東大も、大学の国際比較で2けた順位に甘んじ、海外の人材活用などでは国内の他大学にも後れをとっている。危機感は強く、対策に本腰を入れる。

東大によると、外国人の学術スタッフは現在、約250人。日本人を中心とした全体では約5000人で、外国人比率は5%弱にとどまる。

国内の他の大学では、学術スタッフの範囲や常勤・非常勤の違いなどで統計の取り方が違うものの、外国人比率は上智大が48%、早稲田大で8%前後。東大は、「国際化」への優先課題として、外国人スタッフを充実させることにした。

海外の人材の受け皿として、外国人向けの宿舎や奨学金の整備も進める。東京・本郷キャンパスのそばに外国人の研究者と留学生向けに220室規模のゲストハウスを建てるほか、千葉・柏キャンパスのそばにも施設を用意する。都内を中心に既に500室程度の外国人用宿舎を持つものの、「留学生だけで2000人を超しており、整備が追いついていない」（施設企画課）現状を改善する。

東大によると、国際化の程度を含む大学の総合力について、海外の調査機関や雑誌が最近まとめた世界ランキングで、東大は12～19位にとどまっている。世界第2の経済大国を代表する大学として、対策を急ぐべきだと判断した。